



里見八犬傳

拾六篇

卷二十九



13  
3416  
90



13  
34  
90

# 十六編五卷之内

二十九年

松林

瑞音院

南總里見八犬傳第九輯卷之三十九

東都 曲亭主人編次

## 第百十五回下

この題目の既前巻の出より所云野  
緒を放ち信乃戰車を焼く即是ん

今一回と釐て二巻の做きと其例今といへとも本傳の二百七十回中て圓  
圓とすま欲まる故是より下り回毎の長編るるをざるん

却説大飼現八も則三千個の隊の兵を馬の前後に従せし五十四回を投  
いそ程もそれ前不屯せし四五千の軍兵あり敵射方欵とむり近づく  
隨ふ又よく見れば是則別人るる大塚信乃成孝が杉倉直元等と共に  
あ小現八を待つけり御向現八も還しけり一千有餘の隊の兵も皆束て隊の  
中より在りかぞ開が小頭人老兵們も俱に大飼を相迎へ信乃が用意を告

八犬傳九輯卷三十九

文英堂藏

るども現八是をうち听々。馳々馬より下立。隨即信乃の對面を當下信  
 の乃がの争。御向我寄隊の戰車を數破り。且一方を殺用。於て杉倉田税を極  
 ひるれども。和殿の安危心。櫛れは遠く去る。這里に在り。悄地に存候。遣とて  
 其勝敗を現せし。和殿の既の名ある敵一人を生拘り。猶大敵を權退けし。  
 後安く做さんと。及て隊兵の言はれを欲せし。銃術を修煉せ。雄兵二十名。那  
 里に在る。其他の從ふと。饒さ其隊の兵們の。かゝる來て。事情も知れり。か  
 いろふまるや。と思ふ。我さへ遠く去難く。和殿の來ぬと待。居り。ある。那生口と  
 知れる者あり。他の頭定主の家臣。齋藤左兵衛。佐高実の家子。ゆ。兵衛太  
 郎。盛実と喚。做さ者。衛の微子。瑕。小異る。ぬ。主君の寵。後。な。戰車の頭人  
 たり。とのり。然る。是。要。ある。者。へ。の。餘。も。思。ふ。ゆ。れば。則。田。税。力。助。隊。の。兵。三  
 百名。を。從。せ。五。十。四。田。の。陣。所。へ。遣。し。た。和。殿。の。首。尾。は。甚。麼。と。問。へ。現。八

然れば。と。我。箇。様。々。々。計。ひ。敵。の。胆。を。拘。り。し。勢。を。憑。心。鳥。合。の。弱  
 兵。一。會。投。石。の。駭。に。て。衆。鳥。飛。去。る。者。あり。將。も。士。卒。も。驚。馬。謀。に。て。一。個。も  
 送。り。逃。亡。した。迹。は。亦。ある。戰。車。數。十。乘。あり。皆。うち。摧。れ。且。其。馬。を。奪。略。す。  
 後の戰。利。あり。けれ。其。頭。の。所。為。の。時。を。移。し。て。寄。隊。の。返。し。來。ぬ。ふ。遂。に。其。回。り  
 防。は。易。く。し。と思。ひ。之。を。敢。せ。長。阪。橋。を。截。流。し。て。寄。隊。の。路。を。断。る。も。さ  
 儘。退。り。ひ。た。と。告。げ。杉。倉。直。元。も。頭。人。先。兵。側。聞。し。胆。を。潰。し。面。を。注。し。て。さ。も  
 さて。も。と。む。り。の。舌。を。卷。つ。感。服。を。并。か。中。の。大。塚。信。乃。の。跋。然。と。して。却。る。大。飼  
 和。殿。の。胆。勇。の。今。初。ぬ。る。約。四。萬。の。大。敵。を。身。の。只。二。騎。隊。の。兵。三。十。一。呼  
 吸。の。間。に。て。言。下。の。大。敵。を。威。し。退。け。し。其。勢。を。推。量。る。も。全。身。都。て。胆。あ。り  
 ぞ。何。人。も。能。せ。ん。や。實。に。我。邦。の。張。飛。を。哉。成。孝。が。及。ぶ。所。あり。む。然。り。り。り。り。り  
 惜。し。和。殿。の。思。慮。足。る。何。と。る。數。十。乘。の。那。車。と。ら。摧。く。て。時。を。も



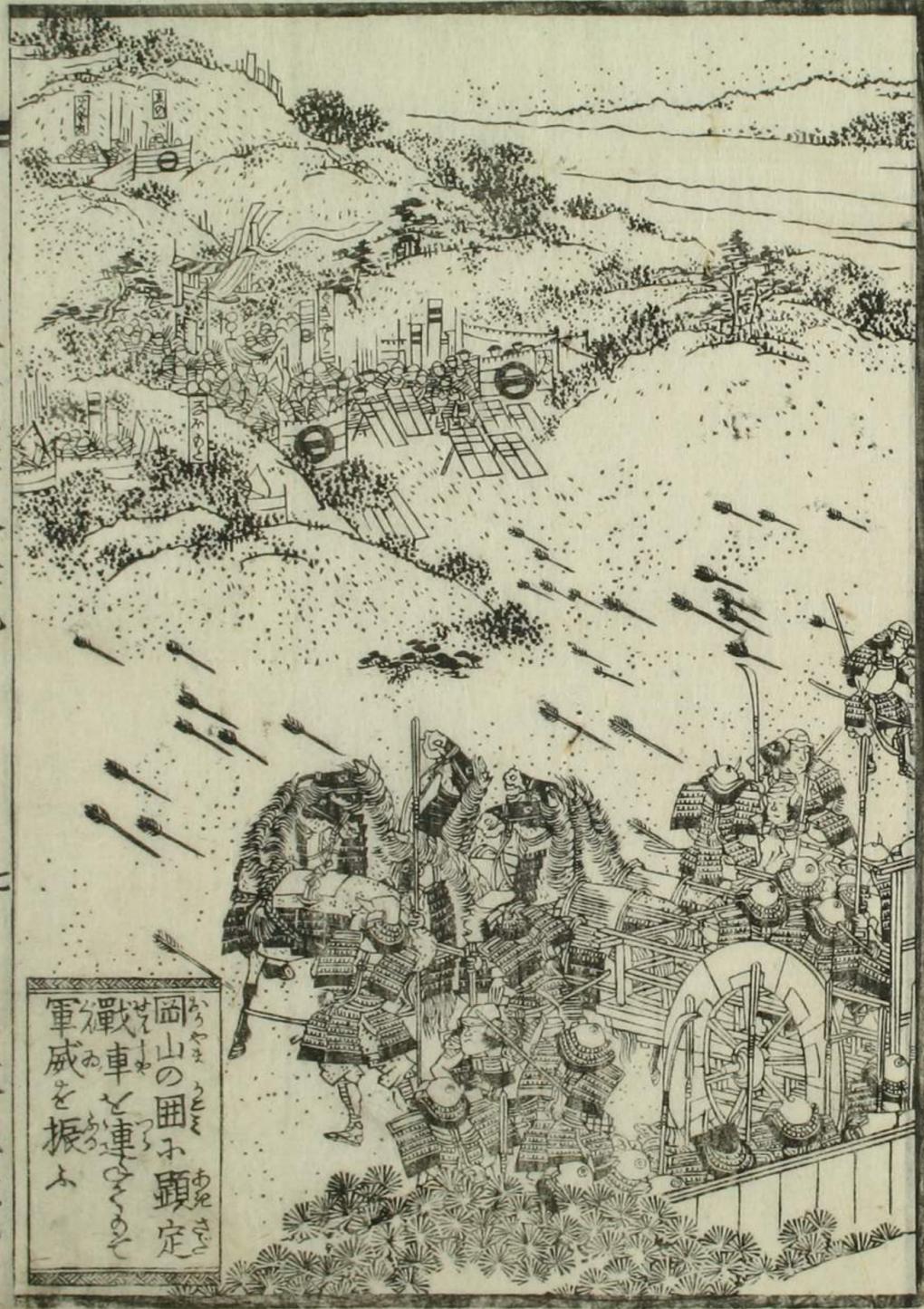


敷捕り一六禍鬼風鎮の如然れども戦粟一千數百苞の比皆早來河の底に沈み  
あゝ亟採揚ぐぐもあつむを殘る二百七十五苞あり其七十五苞を莊客們が忠  
戦奇特の賞禄亦亦賜せ遣し且陣營在り老兵們の爲疾負ふるもの  
あゝ死に至りし者あつむ故に戦粟の形如く減銷して今この固不運登させ  
あゝ二百苞の外ありと一五二十を告知せし和女九郎と福四郎の首を實檢入れ  
る。疾負ふるける老兵們も其漏れを補ひて陳謝の詞を聲けり思ひける  
この一舉の信乃が驚死のへりて現人も眉もち頻單めて兇徒を即時に撃つ  
這一舉の愉快の事なれども戦粟失く復たるる是第一の憂入る船と乗舟  
の水底に撈らるる威引揚が後悔あつむといひ直元も俱におもひ計るふも在  
る所の士卒の五千有餘るる二百苞の戦粟中へ僅か二百支支水底を撈  
採揚るふ其事亟ふ做しなむの疾臺の城へ告稟して戦粟を乞ふるもあつむ

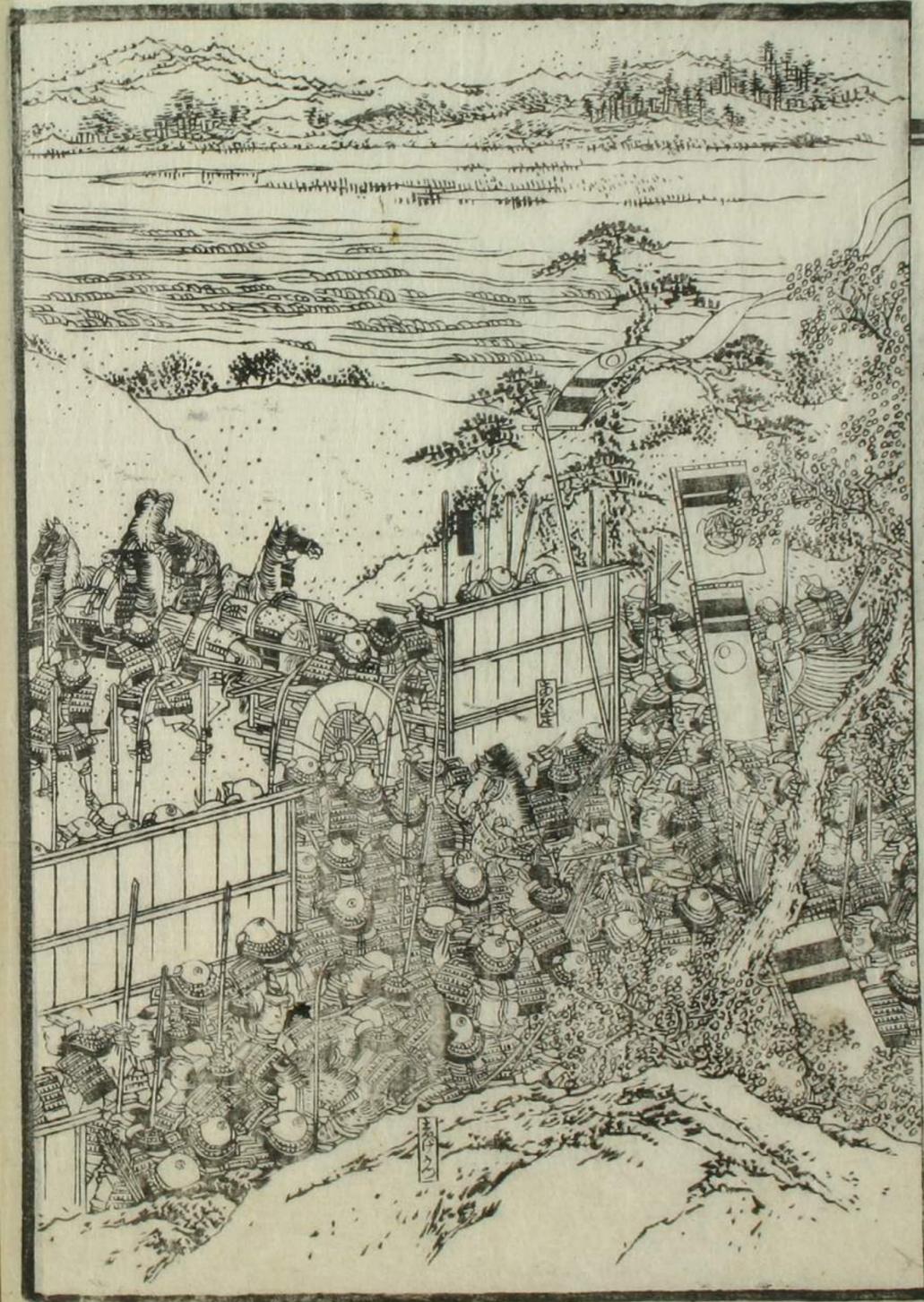
い。説と議を信乃の言を其其の重の日あり今も船と潜出させ水中に撈  
るも或は使を臺の城へあつむせて戦粟を乞ふるも今宵の中におつむ其  
の事做しなむ時大敵急推寄る何ぞ是を防ん志士の溝壑に在るとは送  
まむ勇士其元を喪ふるとはなれむ今何の暇あり沈み戦粟を合を揚んや且  
事あふ至るといふも自他の勝負の事知られ既生口盛実を臺の城へ呈らせ  
素幾程も事の不の字と任々と告稟あつむ御曹司及東の翁翁物を思せ  
まらん忠臣勇士の本意あつむ先疾防戦の備を做させ今之急務するべ  
しと道理を舒く説諭せし現八を首直元逸友諸頭人們の俱に感激し  
敢異議せず然るに準備せしを諸隊に分ち袂間配りし圍る樹間々々  
五十四田の河原あつむ維だり我諸船と那儘あつむ必敵を奪れ然るに  
八天傳九海舟三十九  
五

岡の背る水際小段も亦要閉愁ふ船あつた戦難義及ん時士卒皆ち  
乗りて逃ぎ欲き心起らん古の勇將の船を沈め電を毀ちて死戦と訣せし  
例あり只是進むのさや其退くか路ある士卒の心一致して奮勇日屬百倍  
せんぞあり在る所の船の威前の岸へ退けし困府臺の下に維るし中なるは  
快船二艘とあり留めて這岡の背る枯草屋の中へ隠し措く臺の城へ事の  
火急を告ぐる便宜あるんあいのとて必のるるまを現八諾るひて躬て士卒は  
下知ら准備送る成り果るの宵の簾を焼明して徐に寄隊を疾けり  
介程に寄隊の大將頭定成氏憲房の里見の防衛使大飼現八が大勇大武の  
謀を權され四萬の士卒立足もる逃く假名町を退けし且怒り且取  
らち咳くのさゆらひる姑且して頭定に更な候と遣して現八が後の形勢を規  
せし長阪川の上へ敵退れ一人もあらず橋を截流して路を断るのそんと

頭定是をち少て原来現八奴謀られし他那橋を截流せし我大軍を怖  
るの別小計策ありあつた蚕く樹を伐りし那小川に架渡しね明日未明より  
五十四田に推寄せし今日怨と復えを兵毎いそ下知され成氏も憲房を  
是れは氣をぬき勇をあり俱に士卒と將不て先途の不覚を傲めけり倭而寄隊を  
其詰朝之將四萬の大兵をのり五十四田と臨み攻寄する敵の陣所ありし  
文明の岡に籠れる及昨日高飛車と女九郎劍峯痛四郎が敵の陣營を  
龍衣ひり那身の戦死も敵の戦栗什が七八る倭々の故のそり暴河の水  
底に沈しとのさゆらひる時風く吹くさる頭定馬上に堂とち鳴りて悦びて成  
氏と憲房よあの美を告ぐ且のさゆらひる那犬塚信乃大飼現八が我三連車に懲  
りこれか高所へ逃登りて遮莫戦栗減銷して什が二三あるりといへば幾もでり  
よく支也に四五日と麻共飢疲れり自滅せる疑ひる況や船を奪れりて快成



岡山の陣不顕定  
 戦車と連を振ふ  
 軍威を振ふ



退けくわらむといへ他かろ路を断り我今駢馬三連車より岡の三方を合  
 囲み遂に活路なきべし寄せよ漏ると士卒下知して其攻口を定むる則  
 岡の正面に頭定みたる將とて鷹鳥裂八九郎等の頭人雄兵三々其の隊在り  
 右のく成氏にて横堀在村新織素約及科草七郎望見一郎等近習外様の  
 従兵勘うま左の則憲房より白石重勝雖布五六郎等隊長なる者ヨマ  
 従ふ總軍通々四萬餘名百十數乗る三連車を一隊毎先小備々推登せ  
 ち欲されも岡高けれ車馬找まじ俱小籠と敵の喊の聲と揚は筋前を飛し鏃  
 砲と連放ち息も親れを攻めり信乃現八も毫も噪も無き幕小筋前丸  
 受れ士卒一個も傷損ず敵又盾を被連々攻登らむ欲され弓筋前鏃砲を  
 射く落し敷く浪し或の大石を投下ちる塵粉小做まも勘うねる寄隊の蒙  
 疾見其數を知む矢場小命を殞すもヨマる徳挑戦ふ程小冬の日又蝨く暮

早に寄隊の些下攻口と甘けれも猶稻麻竹葦の如く繞馬とて圍を解く  
 之所の陣營白書の如く俱は箭火を焼續けて明き又攻んとは勢ひ撓む振  
 然も介程小犬塚信乃大飼現八も宵直元逸友等の諸頭人を一揃に取  
 へ信乃が今今日の開戦主客の勢ひを思ふ自家の小勢も高けれ處り  
 ちをりて防ぐ小利あり寄隊の大勢も低れ在る故友々傷損ヨマる然に  
 とく只一戦中敵の弱るべくもあは尙佳地中と日と過き自家の必戦粟竭  
 夷旅肩が首陽の蔽も甲斐文も白踐が會秘首の恥を雪る小由るべし因て執思  
 惟る寄隊の專馮心む所小那戰車の三蝨く是と破り除く何の日も大敵の  
 克ゆんあれも百十數乗る那車と一時小比自敵破り事力もくも做まべ  
 くもあは於是再以る小初大阪が獻り八百八人の一策小水戰の爲のこる  
 此這里も亦あの時小於風火の資助を借る小わの連り建くヨマる戰車

誰より一時の除るれも岡の上よりして蕉火などを投下さる間近うら車火の  
火の移るむて及く敵の打滅されんもの美什麻と談まれ大家ひとく感佩を  
賢慮寔不其理ありとむりりて多る戦車と一時の咸焼くはる段の我のま  
思ひるを教めると異口同様の膝と找め請問へ信乃の然アをと點頭て諸君  
聞きて昔唐山戦國の時燕齊兩國の閉戦不齊の將田單が一夕火牛の謀故  
以て敵の勝ける故事あり火牛の取れ令牛の角毎に蕉火を結附て放ちて敵を  
散馬し其乱るを敷き又我大皇國の源平兩家の閉戦の木苗冠者義仲  
が義旗を北國の揚州に時平家の方人齋明が亦火牛の謀を富樫太郎宗親  
と林六郎光明が籠りて城を夜伐して戦ひ利あり事由阿弥陀寺本平家物語  
卷の第十二回又源平盛衰記長門本平家物語印本平家物語に載る  
る所異なるを記されどもあは参考せしむるに那齋明のま系是加賀なる

白山の社僧より始り義仲に従ひ又平家を降りて這あり其心術の表裏  
をさうりかゝる者なれども那謀の拙いと云ふは然らば和漢の火牛をとりて敵を破  
すの那田單と這齋明あり我の亦其類單の倣ふ火牛を放ちて戦車と破ん  
田税生の今宵事熟る隊の兵十名許と従へる那枯蘆裏に隠し措き隊の  
箇の快船より乗りて臺の城を参り東の翁のを告ぐ真向國府吉雲の  
近郊に莊客の家を在る牛とよき召させ井と亦情地の船に乗せ翌の宵  
這岡へ牽りて來り今宵の宵の我其時分を料り金鼓を鳴り大く  
寄隊を散らし河原の餘念及ぎて和殿の往復易らるべとの指を傳へて今  
日十二月六日新月の既没りぬ翌の宵も月の夜中不没ん潜ぶ為鳥夜を  
よけれ八日定正水路を歴る洲崎に推渡らるるま云風聲豫あけける  
寄隊の這里も行徳口も其日と契り期を推て必勝と急ぐる大川大田の

るや俱この是これ是あ這あ景あ河あの河あ助あ在あるあ。送あ見あるあ暇あをあれあと大あ川あ之あ大あ田あ之あ那あ  
里あ之あ愆あああるあもああるあ今あの急あ務あの火あ牛あのあのあ然あにあも我あ方あ寸あの及あぶ所あ獨あ賢あ達あ  
計あるあああるあ這あ義あの既あ小あ犬あ飼あと商あ量あして右あ如あし天あも明あ甲あ斐あるあけあんあとあ  
言あ叮あ寧あ小あ説あ示あしあいあをあ其あ現あ八あも俱あ小あ中あ。喜あ美あ近あ郊あ小あ求あるあ牛あのあ少あのあ直あ  
知あるあも寧あ一あ頭あのあ好あとあ其あ明あ日あ只あ一あ日あありあ企あてあをあ待あべあれあと心あ屬あれあ直あ  
元あ考あ頭あ人あ老あ兵あ感あ佩あしてあ辭あして持あ口あ退ありあけあ。悠あ而あ田あ税あ力あ助あ逸あ友あの夜あ丑あの  
左あ側あに隊あ兵あ十あ名あと從あへあ岡あの下ある枯あ蘆あの裏あに維あびありあ快あ船あ二あ艘あも乗ありあ  
情あ多あ小あ園あ府あ臺あの城あに赴あく程あ小あ信あ乃あ現あ八あも士あ卒あ小あ下あ知あしてあ猛あ可あ戰あ鼓あとあ鳴あ  
らあ。喊あの聲あと颯あ。目あ今あ急あ攻あ下あるあ勢あと示あせあるあ寄あ隊あの吐あ嗟あと驚あ諜あして  
哀あれあ犬あ氏あの戰あ栗あ竭あけ夜あ驅あして落あんとあまあるあ遣あるあ免あ者あ推あ包あぐ一あ人あも漏あさ  
をあ敷あ捕ありあねあと相あ罵あるあ戰あ車あと連あひあて大あ刀あと披あ持あちあ鎗あと挾あちあ旗あと推あ建あ築あ前あを

飛あ。鑛あ砲あを連あ發あちあ。透あもああるあ構あるあ敵あの徒あ其あ勢あのあ權あ且あく音あ  
もせあ原あ東あ那あ奴あ們あ出あ後あれて羽あの夜あと俟あるあべあ。益あるあと皆あ呼あぶあ各あ其あ兵あを  
解あて惣あ睡あまあ欲あすあ敵あの又あ戰あ鼓あとあ鳴あらあ喊あの聲あと吐あと颯あ。驚あ馬あと始あの  
如あし寄あ隊あの是あ不あ睡あるあもはあせあるあ不あ遠あ夜あと明あせあるあ他あ所あを見あるあ暇あ中あの故あ小  
田あ税あ逸あ友あが船あ小あ乘ありあ河あを渡あして園あ府あ臺あの城あに赴あじあと寄あ隊あ小あ知あるあ者あるあらあらあ  
任あ而あの次あの日あも寄あ隊あの又あ只あ三あ連あ車あと岡あの下あ相あ連あひあて攻あるあとあの攻あ系あ一あを信あ  
乃あ現あ八あも物あもせあ敵あの箭あ丸あを幕あ小あ受あちあ推あ登あらあとあ者あ猛あ者あああれあ或あの弓あ箭あ  
或あの鑛あ砲あ或あの石あと投ありあて岌あより是あを擊あちあ階あまあ皆あ中あらあとあ者あるあけあらあ  
ああの日あも寄あ隊あ小あ傷あ瘡あ見あるあ終あ日あ挑あ戰あのあ又あの日あも短あくあて又あのあらあ  
暮あああけりあ然あにあの宵あも信あ乃あ現あ八あも逸あ友あがあらあるあ時あ分あを料ありあ士あ卒あ小あ下あ知あ  
多あ又あ攻あ下あるあ兪あ勢あと示あすと昨あ宵あの如あく金あ鼓あ回あるあらあ鳴ありあて寄あ隊あと連あひあ

驚きまゝ寄隊の都て先度不懲りて敢近き找もども然れども由断せし只攻口を  
 守るの河を渡り来て固入る敵ありとも知りけり。介程お田税力助逸友を  
 この夜子二刻の比及お國府臺よりから来て信乃現八の報を告ぐ。牛を欲ま事  
 ること多く臺の城入るといふ。隨即東六郎辰相お急を告ぐ。牛を欲ま事  
 情を詳お空え上りお那里お嚮し。那現八が生口盛実を告ぐ。折義通君感  
 悦凌々を有徳れ自家小勢といふ。猶全勝の空えおんと最準心く思ひ家  
 寄隊の那巧做せり。三連車と多く先ゆく。五十四田を臨み推寄來ぬ。備鍊石の  
 異るも後二天士の武勇も勢二つ中るお由多。文明の岡山お執登りて其英氣を  
 避ると云風聲おれおる。前叫鏡响喊聲まで河を隔り夜とわり日と多。  
 おお合る如くおろし。刺自家の戦粟の徳の故わて多く暴河の水底お論  
 事のお幸るを誰いとも知られぬ。義通君と首を宿老頭人士卒をい

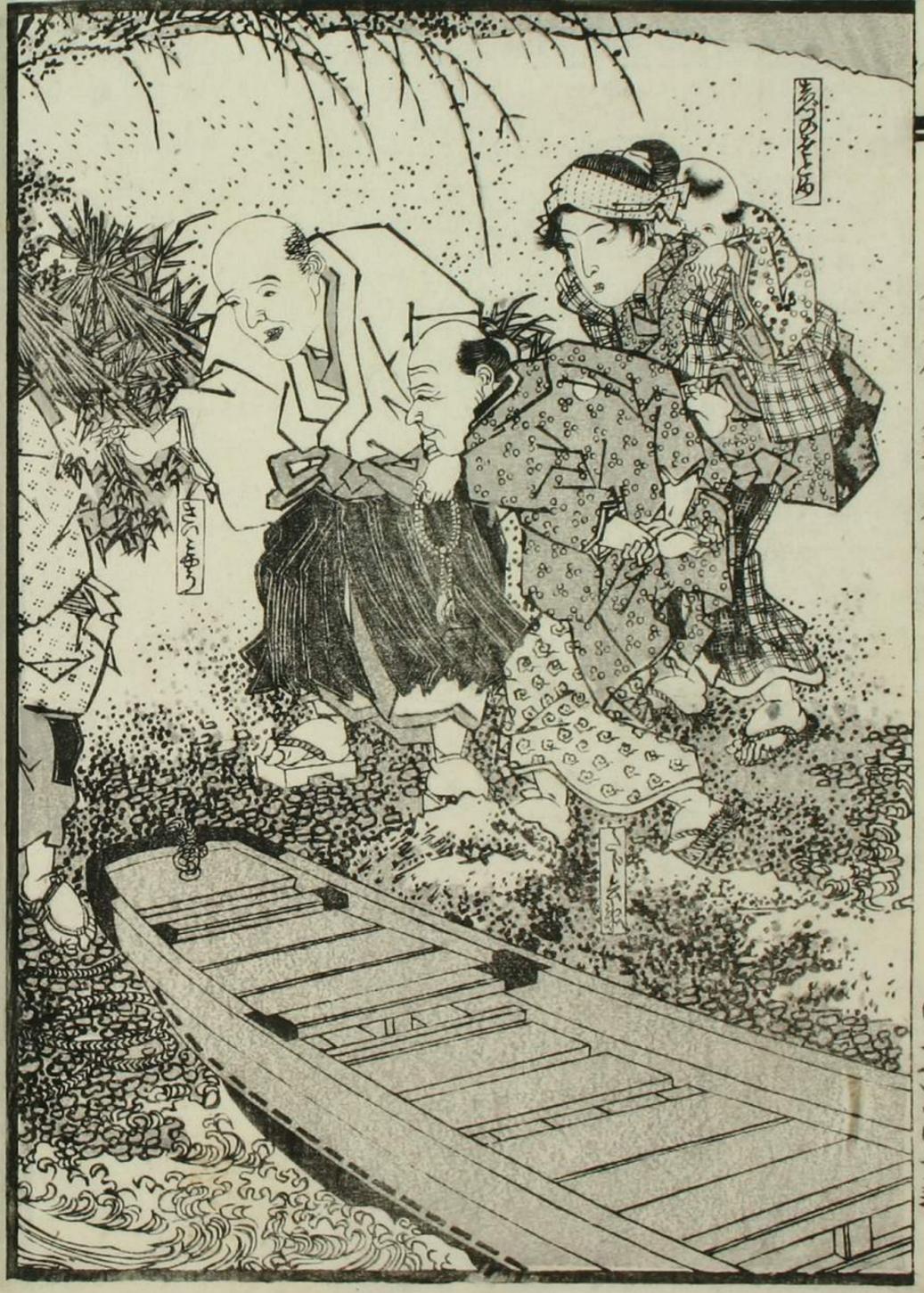
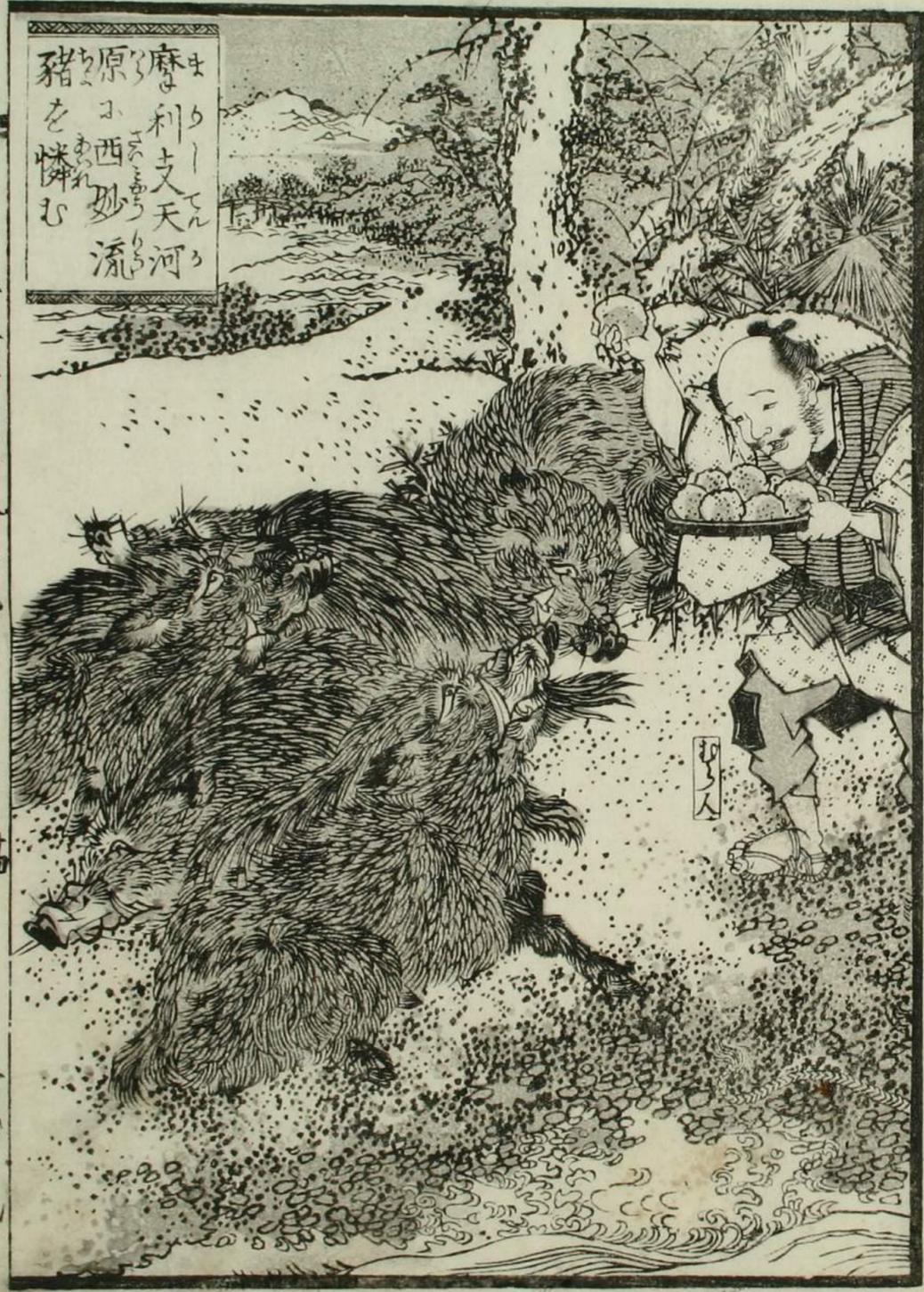
の心安らげ。船て衆議を凝させて夜お紛れ。岡の陣營お戦粟をいれさせん。  
 然るも城内お在る所の士卒と盡し船を出して。御曹司俱一なり。二天士と相資  
 け。雌雄と一時お決見。狄と云意見。區々お口唇を東辰相らち多。各お不意衷を  
 盡す。議勇お似れども。寄隊の四萬の大兵を。是お加るお。那駢馬三連車の  
 取陣をのり攻るお。虎お翼を添ふる如く。勅敵と知りる。當城五六千の  
 士卒と。河を渡りて。伐せお毛と吹て。疵を求る。悔るを。然れ。翌の夜  
 甲夜過て。烏夜お乘りて。戦粟をいれさせ。おあこと。おけん。幸り。岡の遠方る。  
 水際お敵の囲る。是究竟の便宜。音お我。大。各。身。衛。靈。玉。あり。  
 且伏姫神の真助。おん。縦。窮。阨。の中。お在り。も。大。敗。る。お。河。  
 隔る。長。視。て。可。惜。日。と。過。き。轍。鮒。と。枯。魚。の。市。に。訪。ふ。寛。急。の。理。お。暗。然。者。先。  
 戦粟をいれさせ。頭人を擇む。則真間井樅二郎と。継橋綿四郎。課て。

翌の夜丑三の時候戦粟千苞と二十箇の大平駝舫より載り雄兵約莫一千餘名急暴河を横り渡して岡の陣營を届るべしと定むるをその日成議の果ありある所其夜岡の陣營より田税力助逸友が信乃現八の使を連て十個の従兵と俱小情地の臺の城を奪ち則東辰相就て信乃が計畧を告票し且牛を求ると急るれば辰相听ひ歎ひ感して敢亦他議不及む逸友並に従兵們を勞ふ件の衆議の趣と戦粟餽りの準備ありの事も詳示談せしむを逸友則義通君小見参して稟呈と始の如く牛を欲するの外敢他議多し了ら義通君事の危窮の一とむらち駭驚又信乃が謀る所微妙を歎ひ感して六郎強々那需ふ心定しとてのそを夜辰相奉り退り出で次の日早天より馳近郊の村正莊客を下知して其家毎不在耕牛と今日駝集め疾當城を牽りて参るべし必過分の重賞を人備愆く隠して早を

る者わ其罪免るべしと最も緊を旋々催促連りければ下晡に至るまで牛二頭も牽りて東の四境の村長故老們を連立り城を詰りかきと稟呈す今朝疾仰付させぬ耕牛のついで一村毎に御示して隈なく暮りゆひま約莫這四下る莊客の田圃を鋤せしめ東西を駝せしめ皆馬を以て牛を使ふ者との哀れ一人もいね上總の牛多くあれも路近うれば争何せん今日の御用は達とばかりの饒ませぬと異口同様陳べ辰相を連りて開き安らぬと云はるる局の内其村長故老們を召入れさせてみらるる虚実成質一問ふ皆其稟を断始不違む馬の黄金を牧われも牛他所より求め故不價直馬の廉らぬ人皆欲せぬと陳謝の詞を聲まの伴誰るまはれ辰相よく困果て計の所を知む姑且ての牛を牛小亜角の鹿則鹿と羊の羊の皇國の獸と云はるる這頭不在るものも尚遊樂小大鹿を家畜者ハ是な

たやと向へて大家ありと答ふ。中前所河の邊なる村長也。其次兵衛と喚  
做と者膝を打ちて哀れまほ。目今尋させぬ身。鹿と飼ふ者とのあつとを思ひ  
へも老て最大なる野猪のよ人小押する。我村小多くあり。角はるればと長く。こ  
いのべく。御用不達せぬ。故と真実告ぐ。請回へ辰相討り眉と頻車めて開  
亦奇なる。鹿へ京録倉の茶店を異鳥と共飼押して人小觀するものありと  
言けども野猪の猛獸人小押つて死者多し。故に畜措るの故とあらぬ。其美を告  
よ。甚麼と。向復されて然し。今茲十月の時候最大なる野猪六十餘頭皆  
四足を結紐り。儘虚舟に載せられ。前所麻利支天河原の岸へ流れ着  
た。ぬは足を視る者驚愕に怪して打殺せし。罵るものあり。否々殺す。益々然と。助  
けて陸へ外へ。遂に田圃の害と做さん。只突流せしものあり。と。麻利支天堂の別  
當る。西妙と喚做し。修験者へ持た慈善の本性を。俱に河原小立して其野

猪と相ての事。衆人々他を視よ。猛に獸も憊做り。比皆是涙暗と。人小救  
ひを求る。似たり。各位とのまご。知む。昨日安房より父のあはけり。人の噂を。昨日  
屬日安房より。困守の山獵あり。稀なる。仁君也。御座せ。其獲の  
ヨヌ。向の只生捉らまの。敢一頭も殺まを。饒し。あま。中。材狼野  
猪鹿の。或人々害者。或田圃。鼠。皆妨。ち載せ。流し遣り。あつとを  
の。然ら。這野猪も。亦是困守の流さる。獵の獲。あり。狹是も。亦知る。先試  
一二頭。疾這里。助け登り。何れ物。を。大家有理と。悟り。社。毎。四。名  
馳。其。船。引。各。維。留。め。特。飢。三。頭。岸。援。上。四。足。索。と。解。程。  
西妙。則。宿。所。より。亦。握。飯。と。食。是。と。短。尾。と。挿。拜。を。像。く。喫。ひ  
書。昔。も。逃。も。其。四。足を。壓。て。睡。り。存。り。船。多。是。を。見。て。羨。し。鼻。を。鳴。り。て。立。ま。き。を。屢  
る。西妙。と。憐。て。又。衆。人。向。ひ。の。事。既。這。二。頭。索。と。解。も。逃。も。其。人。を。害。を。心。る。痛。







許容あふ幸るんと請ふ辰相らり所其議の都てあるなり然らば真間井  
 樅二郎秋季と継橋綿四郎喬梁の雄兵一百名と相授けて船中和殿の船  
 助せし然るに御曹司の賢慮中も違ひなき又大塚が意見も稱ふて兩全  
 穩當るんとし不逸友重て異議なき隨即辰相と共侶又義通君の身邊遣  
 して事倍々とゆえ上て退りて秋季喬梁の合言其言記て自他百十名の徒  
 兵の野猪六十五頭を牽せて悄地ふ城と水際立て準備の快船三四艘其野  
 猪を載せ人も皆うち乗りく漕せて前面の岸に届る今宵も信乃が時分を計りて  
 連り敵をうち撃つる最中であられれば寄隊の都て立噪りて外を見らるるも  
 あつとて逸友の船も人もまゝくろく津近ければ時を移さず首尾をゆる  
 看外なる者もろりたる徳而田税逸友の尚秋季喬梁と其徒兵と野猪をそが儘一  
 雲時船に在せり十個の隊の兵をのこす從へく悄地ふ岡の陣營からあつる則信乃

現八の前條の山崖略と箇様々々と告知する言約の及て漏さる初牛のゆ  
 かたりの後中野猪の奇事ありて六十五頭とゆるる且義通君の賢慮を  
 真間井継橋頭人の隊の兵一百名と徒せり野猪を牽せりあつる事  
 尾を報知する現八武者助が鉄ひのうもあつる側聞せる古内俱教二頭人  
 老兵推並て奇也々と稱賛を當下信乃の竹然と逸友の向ひての言宣足  
 物不奇偶ある今小初ゆるる牛と求る牛とゆえ反て思ひ多ゆる野猪の老  
 たるゆゑゆゆるは是も亦人か人智の勢なり致さるるなり且其野猪を憐  
 留めり社地の番措ける麻利支天の別當西妙と那加賀の白山の社僧齋  
 明と字の異なる唱ハ似たり亦因果自然不出て今古約束あるが如く名詮自  
 性とのひつべし是も亦我兩館仁義の御餘徳我伏姫神の冥助るるを信  
 妙用に至んやとのひつべし側を見えれば現八然りと點頭て卒とたつる共侶も塵津

あり相並び。洲崎のくま富山の方より向ひ遙拜して其恩徳を謝する。黙  
 禱訖りて信乃は又逸友を勞ひて我急策を意外。火牛の易る火猪とて  
 せる。その是の和殿の功あり。時を待たず。天の明て空を穿る。先野猪と  
 護送の頭人真間井継橋隊の兵も疾喚集り。準備せむ。その逸友  
 あり。水際に至りて。秋季と喬深より。告共侶。其隊兵  
 野猪を牽せ。かへり。信乃現八。秋季喬深。今宵の加役。勞  
 あり。俱其野猪を見。実六十五頭あり。且。増。形大。牙長  
 く。人小。狎。敵を敗る。究竟の奇物。の上。や。思。天。飲  
 び。直元。古内。俱教二。暇。老。兵。威。下。取。以。て  
 あり。觀る者。駭嘆。神。稱。當。下。現。八。約。角。の  
 は。獸。の。人。觸。力。あ。則。牛。と。羊。鹿。其。角。牛。より。長。其

つの。角。技。あ。我。蕉。火。を。結。着。る。當。取。宜。似。其。性。痛。人。か。怕  
 あり。物。觸。る。勇。り。開。敵。陣。放。つ。も。必。逃。度。を。失。何。を。て。よ  
 戦。車。と。焼。く。野。猪。の。角。長。け。れ。代。べ。況。や。其。勇。り。て。瘡。を  
 負。ふ。と。奮。勇。十。倍。敵。を。擇。ま。て。馳。ま。る。獵。夫。も。制。か。つ。を。り。て  
 匹。夫。の。勇。士。と。野。猪。武。者。と。い。ふ。を。思。い。那。と。思。へ。今。宵。の。所。要。牛。も。勝  
 あり。定。珍。重。々。と。答。言。れ。大。家。然。と。合。信。乃。も。吻。點。頭。く。の。合。笑。れ。る。面  
 復。て。登。見。と。放。り。端。然。と。衆。野。猪。小。向。ひ。て。如。是。女。田。生。今。猜。ま。る。小。安  
 房。中。あり。獵。競。の。獲。る。我。君。の。脚。仁。慈。り。て。流。ま。せ。の。其。筋。の。地。漂  
 あり。又。西。妙。們。が。慈。愛。交。り。て。死。ま。る。と。い。ふ。我。閉。戰。の。封。助。小。を。今。敵  
 陣。放。つ。及。び。て。或。の。寄。隊。小。搏。殺。され。或。の。俱。火。燒。れ。命。と。其。里。必。須。ま。あ  
 り。遮。莫。仁。君。不。殺。の。報。恩。其。軍。功。の。勇。士。亦。勝。て。永。く。竹。帛。載。れ。ん。勉。や

か。と説諭其野豬の孰も安知るぞ。且と抗て見の黥頭不似く。あま欲まは勢  
あり。然るに隊部と做さんと。且現八に向ひて。あま大飼和殿の思まや寄隊の困  
圖の二面不在。其正回頭定主と。左右を許我殿成氏と憲房主と。中許  
我殿のいので。あま和殿の舊君又我あま大父大塚匠作の主筋を。御座を。い  
今。館の仇りとも。那隊に向ひて。戦功と見え。い本意あ。あまの。あま。と談  
現八は。合て定介也。和殿の防衛の正使。い山内の隊。向ひて。我。其子の隊。敗  
久杉倉生と田税。許我殿の隊を任。い。後易。い。と解。信乃。再  
及。又。潤。就。鳥。古。内。と。振。照。俱。教。二。と。急。身。邊。へ。召。て。い。和。殿。許。俱。五。百。  
士卒と領て。權且。這陣。營。成。る。べ。我。火。攻。の。謀。ゆ。れ。て。煙。天。小。沖。り。る。御。曹。司。出  
陣。し。て。當。所。御。旗。と。建。ゆ。り。る。折。か。隊。の。從。ひ。ま。り。て。後。の。進。退。東。の。公。司。の  
指揮。依。り。ぬ。と。詞。い。そ。く。宣。示。を。其。言。訖。り。て。左。右。る。秋。季。天。向。深。と。な。り。て。和

と。あり。御。曹。司。の。御。意。と。稟。し。り。と。云。野。豬。と。護。送。の。頭。人。を。誰。が。隊。か。り。とも  
從。ふ。俱。軍。忠。と。見。い。ぬ。と。い。は。れ。秋。季。喬。深。の。相。欽。び。て。防。禦。使。達。の。隊。小。尾。菊。玉  
へ。と。請。け。り。當。下。信。乃。の。雜。兵。を。も。と。鑣。奴。と。召。て。い。我。が。安。房。も。牽。せ。る。大。江。親  
兵。衛。が。愛。馬。青。海。波。不。飽。を。も。と。秣。を。飼。や。と。蝨。く。あ。へ。牽。せ。よ。い。と。い。く。と。平。遣  
と。又。現。八。向。ひ。て。い。和。殿。も。豫。知。る。と。那。青。海。波。の。老。館。の。曩。親。兵。衛。小。賜。の  
は。東。國。一。の。駿。足。と。い。ふ。大。江。親。兵。衛。の。秋。使。立。ら。れ。て。遙。小。京。不。赴。と。い。ふ。今。小  
至。る。ま。で。歸。り。來。む。と。い。ふ。這。回。の。大。事。小。逢。さ。れ。ば。と。朽。惜。か。思。げ。れ。切。て。他。が。馬。も。這。戰  
場。小。伴。を。本。意。不。充。ん。と。思。ひ。く。往。る。日。稻。村。を。小。陣。の。折。厩。寄。音。小。太。の。ま。を  
告。ぐ。牽。せ。來。て。蘇。不。在。り。又。只。這。意。味。あ。る。と。い。ふ。親。兵。衛。が。親。る。け。の。義。士。山。林  
房。八。を。身。を。殺。し。て。仁。を。做。さ。し。我。が。再。生。の。恩。人。と。然。り。六。松。前。の。夏。行。德。る。古。那  
屋。中。他。將。不。死。せ。ん。と。せ。時。我。恁。々。と。誓。ひ。義。あ。る。と。い。ふ。房。八。が。鮮。血。小。流。る

夏衣の我を折より藏め措て年来艱苦の中も敢て喪せざる料を今番  
役も不肖の我身防衛使の重任と稟せり。此地の敵は對へば折を  
他が義名をいふ世不頭して命の親を洪恩の其萬一不報んと思ふるの準備を  
他が深血の夏衣と親を縫せておる在り。親を則母の衣親を舊恩と背棄て  
敵の中ら身一箇にして名二箇且親兵衛の馬に乗る。則二役兼帯の任重  
けども己べらうは義の付る所われ介るの隔昨の閉戦は只是敵の強弱を  
試んと思ひの。晴の軍陣を那日大江の馬に乗る。亦山林の深血の親を  
掛きて在りける時多哉。今日の閉戦は兩家の雌雄を在り我計畧は寄  
隊の三將と虜おせん然らざる拙策岳詰む敵の首と捕らる。秋西箇一箇の  
大殺され那馬を跨り。這親を掛て寄隊を敗らむ。欲て那見ふと意哀を示  
きて前も雜兵持せる。親を取らむ。開け現八を望毎不感嘆せむと云

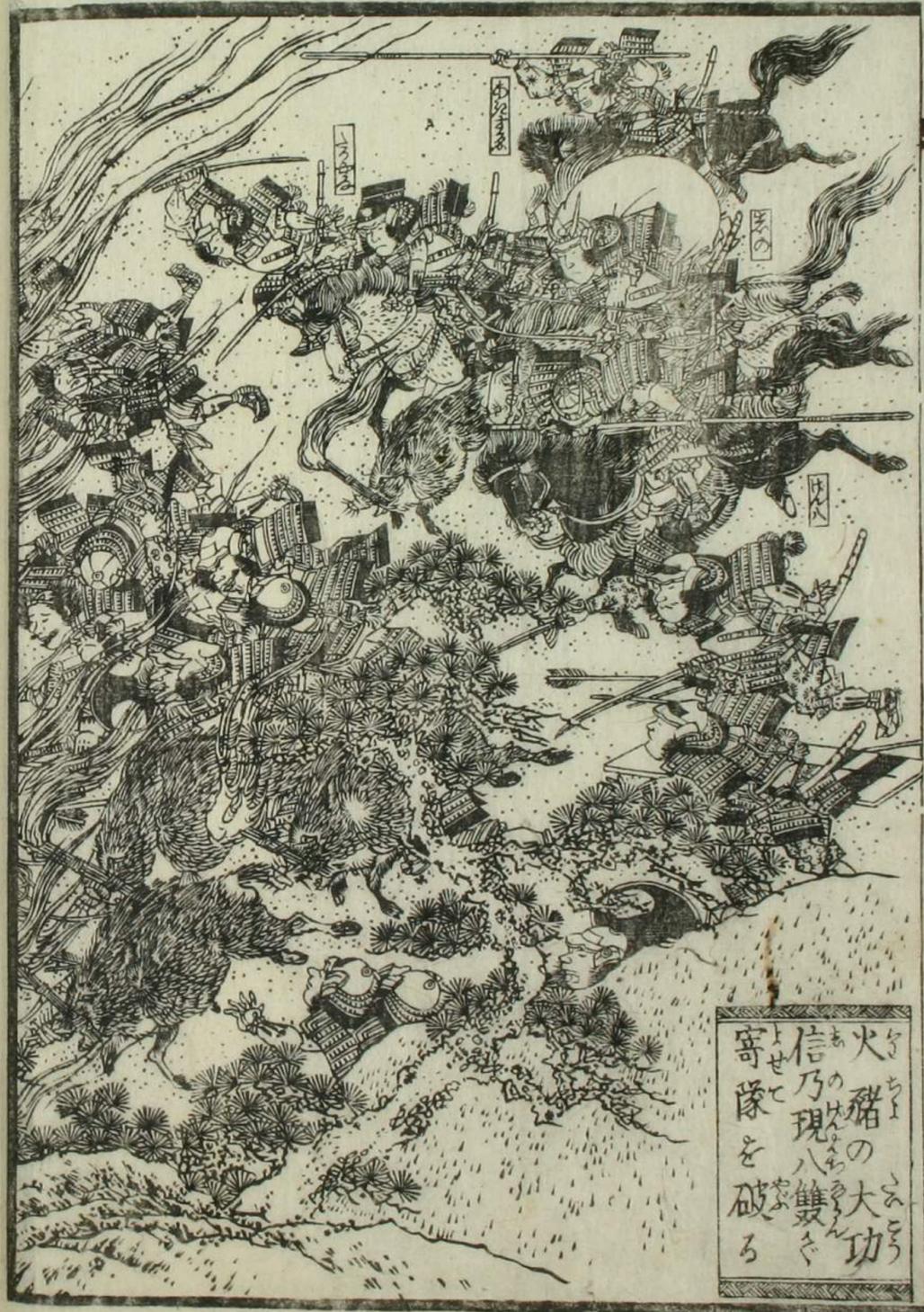
とる。直元逸友等の諸頭人と共侶の無火の光を就く。先其親を執視  
る。現かの折より記の。信乃が病中不被る夏衣を。房八が血の塗ま。其色  
六稔の今に至りて毫も変らざり。則親を做ま。猶暗と定め。見  
親の中央の大書。里見八丈士隨一人大江親兵衛金碗宿禰仁先人  
義士山林房八之紀。二二十八言を四行を誌したる用心正首を。直  
元逸友秋永喬梁。古内俱教。二に至る。當時の情由を云云と。知亦も  
知らぬ。推並と感。思ぬ者多。就中現八と踞然とて。信乃が。那行  
徳の旅宿の折和殿と俱小艱苦と嘗。我と天田と只是の。山林が義  
侠の死を悼む。六稔の久し。只是一見の如く。報恩正の時と。ゆ  
け。和殿の忠信至まり。盡せり。我を及ぶ。及ぶ。只願。言。已。折。ら  
又那兩個の鑣奴も。俱不足。面色。多。跪居。か。信乃。向





八幡九車

九二



八幡九車

火猪の大功  
 信乃現八雙々  
 寄隊を破る

代々信乃が跨座る。連錢草毛の駿馬。雲珠鞍置て牽りて來ぬ。信乃の  
 負ふる船の笠前。漆血の纒をうち掛。重藤の弓と握持。現八直元逸友杖  
 季喬梁們と共侶。各馬ふうち跨りける。約莫這面防禦使四頭人の鎧の絨  
 絲太刀器械。針脛衣。至るまで。打扮前日。弥増せると細小名状。まがら信而  
 二天士。兩隊長の二面。立つれ。各一千五百の兵を前後左右。不從へ。炬を附る野  
 猪と各真先。牽せり。まご明や。星影寒。樹間々々。張亘。一。幔暮一  
 度。斫落させ。岡の下。敵陣へ勇。火猪の數と盡して。放ち。鬼放ち遣  
 る。勢ひ脱免。小異る。人畜一。檢せり。野猪の數萬の寄隊と。怕れ。前備  
 一戰車の下へ。潜り入り。亦走ら。程。牙。附。火の又。戰車。燃。程。て  
 先陣。忽地。煽。る。その日の勝負。甚。摩。ぞ。下。の回。解。分。ると。聽。ね。か。し。

南總里見八代傳第九輯卷之三十九終

